

喀痰咯出困難をみたが、6例ともほぼ順調に経過した。2例は、術後5月および9月経過し健在であるが、3例は、術後4年、1年11月および1年1月で他病死し、1例は、術後10月で癌死した。80才以上の高齢者肺癌に対しても、I、II期で重篤な併発症がなく肺葉切除で手術しうるものに対しては、全身状態を充分考慮した上で、積極的に手術を行うべきである。

17) 当院における肺癌外科治療の現況

佐藤 良智・今泉 恵次 (長岡赤十字病院 胸部外科)

江部 達夫・金子 吉一 (同 内科)

昭和47年より現在まで約670例の肺癌症例を経験した。47年より53年までの手術率は14.3% (24/168例)であったが、54年以降は次第に増加し59年1月より9月までの手術率は38.3%であった。昭和54年以降に施行された154例の手術例について検討した。154例中女性は40%を占めた。組織型は、腺癌53.3%、扁平36.4%、大及び小細胞癌が4.6%、その他5.8%であった。術式は葉切76%、肺切9.1%、部分又は区域切除5%、試験開胸8.4%、sleeve 2%であり、治癒及び準治癒手術が60.2%を占めた。手術死亡は2例(1.3%)あり、3ヶ月以内の死亡例が6例であった。累積生存率、症例別及び組織型別生存率も併せて報告する。

18) 生後早期に手術をした Bochdalek

孔ヘルニアの一例

相良 理枝・上野 光夫 (立川総合病院心臓血管センター)
小菅 敏夫・春谷 重孝 (立川総合病院心臓血管センター)
坂下 勲

今回、生後約12時間で、Bochdalek孔ヘルニアの根治術を施行した例を経験したので術後管理も含めて報告する。

症例は、生後1日目の女児で、出生直後より cyanosis が強く胸部レントゲン写真にて、Bochdalek孔ヘルニアと診断され、根治術を施行した。

術直後に播種性血管内凝固症候群を疑わせる出血があり交換輸血を行ない事なきを得た。

呼吸管理は、始めサーボ 900C を使用したが、補助呼吸への移行ができず、ニューポートベンチレータに変えてから補助呼吸が可能となり、呼吸器より離脱することができた。

患側肺の拡張は完全とはいかなかったが、術後28日目に抜管することができ、その後の経過は順調であった。

19) 外傷性横隔膜破裂の1例

佐藤 佳樹 (郡山総合病院外科)

大田 政廣・鷲尾 正彦 (山形大学第二外科)

外傷性横隔膜破裂は直達型と介達型に分けられる。我々は、交通事故による介達型右横隔膜破裂を経験したので報告する。

症例 30才 女性

臨床経過 昭和59年11月10日、交通事故にて胸腹部を強打し救急車にて来院した。血圧90/60、呼吸困難あり、腰部、前胸部、上腹部に疼痛強い。胸部 X-P にて右第4、第7、第12肋骨に骨折と右の横隔膜の挙上を認め上腹部痛が増強するため、内臓損傷を疑い緊急手術をおこなった。開腹すると右横隔膜中央部の裂創を認めた。胸腔内損傷も疑われたので閉腹してから、開胸すると右横隔膜中央部に約10cmの裂創があった。横隔膜は直接縫合した。術後は呼吸困難は消失し、経過は順調で、60年3月14日全治退院した。以上横隔膜破裂の一例を報告した。

20) 乳癌術後の Co 照射難治性潰瘍に

対する胸壁再建の1例

松川哲之助・橋本 良一 (山梨医大 第二外科)
上村 省治・上野 明

72才女性、昭和54年左乳癌根治術施行。56年局所再発に対し Co 照射を開始したが胸壁潰瘍形成、照射中止後も潰瘍は拡大し 8cm 径、5~7肋骨露出し潰瘍底は肺実質で肺胞嚢形成、乳癌局所再発は否定、胸壁再建の為昭和60年4月紹介入院した。

手術：第5~7肋骨を含め健常組織部分で肺部分切除と共に潰瘍部を切除。胸壁欠損部に対し有茎広背筋フラップを移植、背部に対し中間層皮膚移植を行った。欠損部補てんに際し潰瘍は感染創の為合成材料は使用しなかった。

術後胸壁再建部の奇異運動も軽度で術後6カ月の現在経過は良好である。

21) 成人の食道気管支嚢の2治療例

田中 陽一・佐々木公一 (新潟大学 第一外科)
川瀬 忠・田中 乙雄
武藤 輝一

成人の食道気管支嚢を2例経験し、治癒せしめたので、先天性の可能性につき若干の文献的考察を加え報告する。

<症例1> 54才男性、昭和57年5月頃より飲食時に咳嗽発作を併うようになった。某院にて精査を行い憩室を

併う食道気管支瘻の診断を受けた。昭和58年5月31日当科にて右開胸で切離、閉鎖を行った。病理組織学的には筋層を欠如していた。

〈症例2〉40才女性、幼少時より飲食時に咳嗽発作あり、また肺炎を繰り返していた。28才頃より右側臥位で咳嗽発作を起こすようになった。昭和60年8月某院にて食道気管支瘻の診断を受けた。同年9月12日当科にて瘻孔切除を行った。

2例共経過を観察中であるが現在特に愁訴はない。

22) 外傷による気管支・食道同時破裂の一治験例

高橋 善樹・鈴木 伸男	(荘内病院)
齊藤 博・石橋 清	(外科)
内藤 真一・深沢 学	(外科)
由岐 義広	
石寺 孝行	(同麻醉科)
佐々木公一	(新潟大学第一外科)
中村 千春	(山形大学第二外科)

今回我々は、交通事故により同時に発症した外傷性左主気管支破裂及び胸部食道破裂を経験した。

症例は22才の男性で昭和60年8月交通事故による胸部打撲にて来院した。初診時、左右気胸、気縦隔、皮下気腫を認め、両側胸腔ドレナージを施行するも、気縦隔、皮下気腫の増強、左肺伸展不良を認め、12病日に気管支鏡及び食道造影にて、気管支食道瘻の所見を認めた。13病日に左気管支形成術、食道裂創一次縫合閉鎖術、縦隔ドレナージ、両側胸腔ドレナージ施行。手術所見では、左主気管支分岐直下に、約3cmの裂孔を、また食道は気管分岐部の上方に7cm、下方に2cmの裂孔を認めた。なお、麻酔管理は十分に対応して行った。経過良好にて術後第47病日に退院した。

以上極めて稀な外傷性食道気管支同時破裂の一例を経験したので報告する。

23) 特発性食道破裂の1治験例について

飯沼 泰史・神谷岳太郎	(長岡赤十字病院)
小林 清男・和田 寛治	(外科)
高野 邦夫・新田 幸寿	(同 小児外科)

特発性食道破裂は、比較的稀な疾患であり発症後早期に外科的治療を行わなければ、予後の極めて不良な疾患とされている。

今回我々は、発症後約24時間後に診断され開胸開腹術にて一期的縫合閉鎖と Fundic patch 法を併用するこ

とによって術後経過良好であった症例を経験したので報告する。

症例は49才男性で、悪心、嘔吐を主訴に当科入院となった。入院後左肺野に異常陰影を認め胸腔穿刺を行ったところ、胸腔内に食物残渣を認め本症の診断がなされた。

本症の外科的治療法としては、いろいろと報告されているが、今回のように Fundic patch 法を併用した例は稀である。しかし術後縫合不全の合併症等なく、又食道内圧測定的面からも食道機能は極めて良好であった。

発病後比較的早期に診断・治療が行なわれたということもあるが、良好な経過をとった一症例としてここに報告する。

24) 食餌により生じた急性食道炎の経験

斎藤 寿一・三浦二三夫	(斎藤胃腸病院)
竹森 繁・黒木 嘉人	
佐伯 好信・坪田 孝文	(富山医科薬科大学第二外科)

急性の食道炎や食道潰瘍は比較的まれなものであったが、緊急内視鏡検査が繁用されるようになり、症例数も増加してきている。その中で、食餌に起因する異物性食道炎、食道潰瘍の経験について検討を加えた。

昭和55年10月より昭和60年10月までに13例を経験した。年齢、性別に特に差異を認めなかった。発症原因は、魚、揚げ物、熱い汁類、アルコールなどであった。主訴は嘔気、嘔吐、胸骨後部痛、血痰および吐血、嚥下障害などであった。内視鏡所見では、粘膜剥離、潰瘍、びらん、発赤などの病変が上部食道中心にみられた。治療は、いずれも保存的に行なわれ、治癒までの日数はいずれも短期間であった。

以上、われわれの経験について若干の考察を加え、報告する。

25) 当院における下咽頭頸部食道癌の検討 — 8 切除例について —

藍沢 修・齊藤 英樹	(新潟市民病院)
桑山 哲治・丸田 有吉	(第一外科)
若佐 理	

新潟市民病院開院以来、昭和60年10月末までに食道癌切除例は79例である。そのうち、下咽頭頸部食道癌は8例であり、全切除例の10.1%にあたる。病理組織学的検索では、a₀ 症例が6例あり、その中に Smno 早期食道癌が1例ある。他の2例は、甲状腺・気管に直接浸潤あ